

食事場面における知的障害児の困難さの実態把握と目標設定

摂食機能と手指の協調を促す指導方法の検討

○竹川 久美子

（石川県立明和特別支援学校）

KEY WORDS: 知的障害 摂食機能 スプーン操作

（目的）

食は人間が生きていく上で欠かすことのできない大切なものである。健全な食生活を日々実践し、おいしく楽しく食べることは、人に生きる喜びや楽しみを与え、健康で心豊かな暮らしの実現に大きく寄与するものである。しかしながら、知的障害や発達障害のある児童生徒は、認知的な問題や粗大・微細運動の発達の遅れからスプーンの握りや操作の仕方、箸への移行など食具の操作が難しく、そのため、殆ど嚙まずに嚥下している、または食器に口を付けて食べ物を流し込んでいる、食べこぼしが多い等、摂食機能の発達に課題が見られる。思うように食べられず困っている様子が見られ、中には児童生徒自身が支援を求めていることもある。また、保護者から食事場面における改善指導の要望が非常に多い分野でもある。

摂食機能は連続した動作であるため実態把握が難しく、改善のための目標及び指導内容を適切に設定し、効果的な指導方法を確立するには至っていない。本研究では、児童の食事行動と摂食機能から改善すべき点を見極め、学習活動を展開する過程を検討することを目的とする。

（方法）

①対象児：知的障害のある児童（以下：A 児）研究開始時 CA: 7 歳 11 ヶ月、右利き、言語による簡単なやり取りが可能である。食べこぼしが多く、嚙まずに食べているようである。

②実態把握（ベースライン）：実際の食事場面の観察とビデオによる食事場面の観察から実態把握を行う。

③指導内容：実態把握をもとに、摂食嚥下の行動機能に沿って指導内容を設定した。第一に、手指の巧緻性向上のために、母指、示指および中指の三指を使ったねじ回し、デコレーションボール摘み、握力の向上をねらったスポイトを用いた色水遊び等の課題学習を行った。次に、スプーンで食べ物をすくって口まで運び、口唇で取り込む学習、その後、咀嚼動作の学習の順で行った。

④指導期間：（20XX 年 4 月から 20XX+1 年 3 月）

週 2 回（20 分/回）実施とする。

（倫理的配慮）

本研究は、特別支援学校自立活動編 小学部・中学部学習指導要領（第 7 章第 3 の 6）「児童又は生徒の障害の状態等により、必要に応じて、専門の医師及びその他の専門家の指導・助言を求める」に従い、校内自立活動ケース会議を経て、倫理的な配慮のもと行われた。

（結果）

（1）A 児の食事場面における実態把握：①食器に口をつけて食べ物をスプーンで口の中に流し込んでいる、②咀嚼せず嚥下している様子が見られた。①②の原因として、A 児が食べ物をスプーンで上手くすくえない、すくった食べ物を口まで運べない、口唇で食べ物を捕らえられないことから、食べ物を口腔内の適切な位置に置くことができず、咀嚼動作が未熟であるものと考えた。

（2）指導実態：手の操作性向上のための課題学習では、ねじ回し、デコレーションボール摘み、スポイトを用いた色水遊び等を行った。見やすく、興味を持って学習できる

ようカラフルで、児童 A が扱いやすい大きさ、硬さのものを使用した。支援として、手順の見本を見せる、教師が手を添えて動きの補助をすることが有効であった。

スプーンですくって口まで運び口唇で取り込む学習では、食べ物をすくって食べる前段階として、ものをすくって移動させる動きを水平方向から垂直方向へと変化させた。視線を移動させ、体を起こし姿勢を保持しながら手を操作するという協調運動を学習するためである。その後、すくう対象を食べ物（約 2 cm 四方のお菓子）に変えた。お菓子は、口に入りやすい大きさで、すくいやすいものを 7 種類試した。ある程度の重さがある方がすくって口まで運びやすいことがわかった。すくって運ぶ際、何度か落とした後、左手で右手を支える様子が見られ、落とさずに口の中に入れようとしていることがわかった。

嚙む動作の学習では、食べ物（細長い形状のお菓子）を歯の上に置いて嚙む課題とした。教師が見本を見せる、教師がお菓子を児童の歯の上に置く（嚙まずに飲み込んでしまわないよう教師が保持している状態で嚙む）、児童が自分で歯の上に置いて嚙むというように支援を変化させた。自分で嚙んでいるうちに、舌で食べ物を移動させて歯の上に乗せる動きが出てきた。お菓子も徐々に硬いものに変えた。嚙んだはずであったが粉碎出来なかったときに、児童から「硬い」という言葉が出て再度嚙む様子が見られた。

教師が児童の習得すべき最終目標を細分化し、その細分化した小目標を確実に習得できるようスモールステップ学習法を用いた。その結果、自己肯定感が高められ、小目標に基づいた学習活動を繰り返し行うことができた。手の形を示した写真カードの提示は、最終目標である理想の形を示していたため、児童が試みても現段階では写真カードで示されている通りにはできず、混乱したようであった。

（考察）

本実践において、児童が困っている場面を何度か目にした。学習場面では、すくいにくく何度も落とす、すくえないときに痙攣を起す、口の中で処理できず口から出す等、給食では、嚙み切れないものを無理に飲みこむ、大きすぎるものは手を付けない等である。大人の目に見えている現象は「食べこぼしが多い、嚙まない」であるが、児童の側から見ると、食器に口を付けて食べ物を流し込んでいる行動は、食べ物をこぼさずに確実に口の中に入れるためであり、嚙まずに嚥下しているのは、嚙みやすい位置に食べ物適量を運ぶことができていない、嚙みやすい姿勢を取れていないためではないかと考えられる。改善すべき点をみつけるためには、目の前の現象を見て、児童生徒自身が困っている点となぜその現象が起きているかを探るという視点を持つことが非常に重要であるとわかった。「食べる」という行動は、食物を口で処理する機能だけでなく、姿勢を保持し、対象を見ながら、手を操作し、摂食動作を行う一連の動作である。本研究では、関連し合う動作を分けて、段階を追って学習できるよう学習内容を選び組み合わせることによって、学習を積み重ねることができた。指導場面で獲得した動作を日々の食事において引き出し、学習効果を上げていくことが今後の課題である。（TAKEGAWA Kumiko）